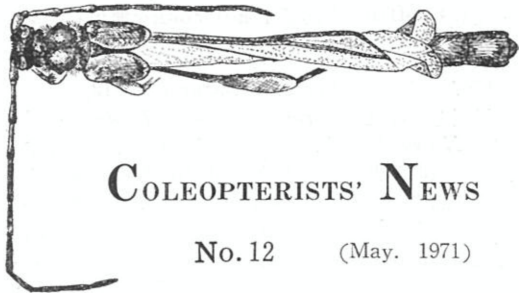




# 甲虫ニュース



# COLEOPTERISTS' NEWS

No. 12 (May. 1971)

## カミキリムシの研究史 (1)

草間 慶一

### (1) 緒言

カミキリムシの研究史については、かつて故大林一夫氏が「日本産天牛類の研究史」を昆虫学評論に連載されたが、第5報の20世紀に入った所で残念ながら中断してしまっただ。しかし分類学の歴史中、カミキリムシがどう扱われたかについては、日本語による紹介をほとんど見ないので、簡単に述べて見ようと思う。

分類学について述べるには Linné から始めるのが順当であろう。彼は1745年に二名法を発表し、植物より遅れて動物界全般にこれを応用したのは1758年であった。この中で「種」の観念を明確にし、いくつかの種を集めて属を作り、属をまとめて目に、目から綱を組み立てることを始めた。しかしその分類は現在の形態学的な点から見ると非常に人工的であり、これがどのように訂正や追加されて現在のような体系になったかを、Mulsant や Linsley などの著書を参考として、カミキリムシに関することを年代を追って眺めて見ようと思う。

この文を書くにあたり、貴重な文献を御貸し下さり、また色々と御教示載いた中根猛彦、黒沢良彦両博士に厚く感謝の意を表す。

### (2) 18世紀のカミキリムシの分類

1758 Linné, *Systema Naturae* ed. 10.

#### (i) 179番目の属 *Cerambyx*

「触角は細長い、前胸背板は突起を有するかまたは瘤状の隆起がある。翅鞘は平行的である。」

この属は前胸背板の形でさらに5つに分けられており、52種を含むがそのうちシノニムおよび変種になるのがそれぞれ1種あり、また現在カミキリムシ科とは認められていないものが2種入っている。

#### (ii) 180番目の属 *Leptura*

「触角は鞭状。翅鞘は先端に向かって細くなる。前胸背板はほぼ円筒状」

本属も前胸背板の形で2つに細分され、22種が含まれているが、この中2種は現在ハムシ科(ネクイ

ハムシ類)に入っている。

#### (iii) 190番目の属 *Necydalis*

「触角は鞭状、翅鞘は短縮され、後翅が露出する。腹部の末端節は簡単」

2種が記載されていて、現在の *N. major* と *Molorchus minor* であるが、Linné はこれらをカミキリとは考えていなかったようで、189番のハナノミ科 (*Mordella* 属) と、191番のハネカクシ科 (*Staphylinus* 属) の間に置かれている。なお *Leptura* の次の181番目はジョウカイ科の *Cantharis* 属である。

#### (iv) 178番目の属 *Attelabus*

現在オトシブミ科になっている属の中に、クロカミキリが入れられていた。

*Cerambyx*, *Leptura*, *Necydalis* の種の合計は76種となるが、現在の知識で Linné の記載したカミキリを整理すると71種で、その内わけは次のようである。この中日本にも産する種数は( )の内に示したが、合計12種ということになる。

<i>Cerambycinae</i>	25 (5)
<i>Lamiinae</i>	21 (2)
<i>Lepturinae</i>	16 (3)
<i>Prioninae</i>	6 (0)
<i>Aseminae</i>	2 (1)
<i>Spondylinae</i>	1 (1)

1761 Linné, *Fauna Suecica Systems Animalis Suecicae Regni* ed. 2.

二名法採用後の昆虫のファウナ研究としては最初のもので、約50種のカミキリがスウェーデンに産する事になっている。

1762 Geoffroy, *Histoire abrégée des Insectes qui se trouvent aux environs de Paris*. Vol. 1.

この中で *Prionus* と *Stenocorus* の2新属をつくり、Linné の *Cerambyx*, *Leptura* を加えて4属にカミキリを分類した。しかし *Stenocorus* の方は現在廃棄され使用されていない。

1763 Scopoli, Entomologia Carniolica.

彼も Geoffroy と同じ 4 属の分類法を使用し、多数の種を新たに記載した。

1767 Linné, Systema Naturae ed. 12.

10版と同様に *Cerambyx* (87種), *Leptura* (23種), *Necydalis* (11種) の 3 属にカミキリを分けたが、以前と異った点は *Necydalis* 属をカミキリとして認め、*Leptura* の次に置いたことである。しかし不幸なことに、その後の混乱を引き起す原因となったが、この属に追加された 9 種のうち、*N. umbellatarum* を除き他はすべて鞘翅が狭く細くなっている種で、1758年に記載されたような短縮されたものではなかった。即ち現在の *Stenopterus* 属や *Ishmide* 属のカミキリばかりでなく、カミキリモドキ科のものまで 4 種含めてしまった。

ここで Linné の記載したカミキリについて纏めて見ると、現在彼が命名した学名が使用されている数は次のとおりである。

1757	Hasselquist, Iter Polaest.,	1種
1758	Systema Naturae ed. 10	71
1761	Fauna Suecica	5
1764	Mus. Lud. Ulricuo	2
1767	Systema Naturae ed. 12	19
"	" 追加 (p. 1067)	3
1768	" " III (p. 224)	1
1771	Mant. Plant 6	4
計		106種

1775 DeGeer, Mémoires pour servir à l'histoire des Insectes.

1775 Fabricius, Systema Entomologiae.

DeGeer がクロカミキリをゾウムシの仲間から救い出して *Cerambyx* に入れた。また同年 Fabricius も新属 *Spondylis* を作り、カミキリとして独立させた。彼はこの本の中で、Geoffroy の用いた 4 属、ほかに新しく *Lamia*, *Rhagium*, *Saperda*, *Callidium* を加えたので、カミキリとしては合計 9 属となった。なお *Stenocorus* 属については、この時の Fabricius より始まることになっている。

1784 Laicharting, Verzeichniss und Beschreibung der Tyrolen Insecten. Vol. 2.

*Clytus* 属を新設。

1787 Thunberg, Museum Naturalium Academiae Upsaliensis Dissertatio, Pars 4.

日本のカミキリ史には特筆される年で、日本を原産地とする最初の種、*Saperda japonica* (リンゴカミキリ) が記載された。

1792 Fabricius, Entomologia Systematica emendata el aucta 2.

*Molorchus* 属を作り、Linné の *Necydalis* から鞘翅の短縮したグループをこれに移した。(詳細は後述)

1795 Olivier, Entomologie 4.

Fabricius のカミキリの研究を進展させて、多数の、特に北アメリカの種を記載した。

1801 Fabricius, Systema Eleutheratorum, 2.

この本で 18 世紀に記載されたカミキリをまとめ、新設の *Gnoma* (オーストラリアからフィリピンまで分布するオサムシモドキカミキリ) を加え 13 属に 593 種を分類した。この中にかなりのネクイハムシ、カミキリモドキ、ジョウカイボン類が含まれてはいるが、その種類と属名を第 1 表に示した。

第 1 表 Fabricius のカミキリの分類

属名	1792年		1801年	
	番号	種類	番号	種類
<i>Prionus</i>	82	33	134	39
<i>Cerambyx</i>	83	52	135	72
<i>Lamia</i>	84	99	136	128
<i>Stenocorus</i>	85	30	137	37
<i>Rhagium</i>	*87	11	*139	11
<i>Gnoma</i>	—	—	140	4
<i>Saperda</i>	88	53	141	86
<i>Callidium</i>	89	86	142	69
<i>Clytus</i>	—	—	143	38
<i>Leptura</i>	90	52	144	71
<i>Necydalis</i>	91	26	*146	33
<i>Molorchus</i>	92	4	147	4
<i>Spondylis</i>	93	1	148	1
計		447		593

\* *Calopus* No. 86 (1792), No. 138 (1801) カミキリモドキ科

\*\* *Megalopus* No. 145 (1801) カミキリでない。

その後は 1820 年代に入るまでは、種は非常に増加したが、属の新設は余りなく、カミキリのどこを特徴として分類するかに、色々の工夫がこらされた。(後述の「亜科への分類」の項参照)。

この間に発表された主な属は、*Parandra* Latreille (1804), *Stenopterus* Illiger (1804), *Callichromes* Latreille (1816), *Dorcadion* Dalman (1817) などである。

### (3) 科 (Family) の概念について

前述のように Linné が 2 名法で分類を行った時、すでに綱 (Classes), 目 (Ordines), 属 (Genera), 種 (Species) は使用されていたが、科の概念は無くして少し遅れて生じた。科は 1780 年、Batsch の創意によるとされており、次いでフランスの学者 Jussieu により植物については 1784 年、高等動物では 1789 年の発表が最も重要なもので、19 世紀に入る前に大綱は決定された。

甲虫でも Latreille (1796) の分類に Family に

相当する言葉が用いられているが、その内容は現在の科よりもはるかに大きいものである。Linsleyによるとカミキリを他の甲虫から区別して、現在の科に相当する概念を作ったのは1815年の Leach の Cerambycides から始まるということである。これ以前でも Latreille の 1809年の Cerambycius も、現在のカミキリムシ科と一致するように思う。

この頃から19世紀の中頃までは Family Cerambycidae は現在の亜科に相当するものに使用する人が多く、そのため現在のカミキリムシ科全体に対するものに、Latreille(1817)は Longicornes なる語を提唱しており、フランスでは永く用いられている。一方英国の Westwood (1840) は Eucerata と言っていたが、これは現在廃語となった。

しかしカミキリムシ科の内容は現在でも一定していない。Gahan (1906) は Cerambycidae と Lamiiidae に分けて“フトカミキリ亜科”を独立の科に昇格させており、ブラジルのカミキリ学者の Lane も現在この説を採用している。Linsley(1962)は Disteniidae と Cerambycidae とにして“ホソカミキリ亜科”を別科としている。また毎年その年の新属、新種が纏められている Zoological Record は現在でも (1966年が最新刊) Prionidae, Cerambycidae, Lamiidae と3つの科に分けている。

#### (4) 亜科の分け方について

カミキリムシ科として一つに纏まる以前から、カミキリの属を幾つかのグループに纏めるという試みはなされており、その最初の組織化されたのは Latreille の Histoire naturelle des crustacées et des insectes (1804) と思う。それは次のようなものである。

科	亜科	属	Section
Cerambycins	Prioniens	<i>Spondylis</i>	
		<i>Prionus</i>	
	Cerambycins	<i>Lamia</i>	
		<i>Cerambyx</i>	
Lepturetes	———	<i>Callidium</i> { <i>Callidies</i>	
		<i>Clytus</i>	
		<i>Molorchus</i>	
		<i>Necydalis</i>	
Lepturetes	———	<i>Leptura</i> { <i>Stenocore</i>	
		<i>Lepture</i>	

前述の Leach もカミキリを次のように3つに分けた。

1. 上唇 (Labrum) は非常に短いかまたはほとんどない ..... Prionides  
上唇は非常によく目立つ ..... 2
2. 触角の付着点は複眼の彎曲部の内にある。 ..... Cerambycides  
触角の付着点は複眼の前方にある。 ..... Lepturides

Prionides には *Snondylis*, *Prionus*; Cerambycides には *Lamia*, *Saperda*, *Cerambyx*, *Clytus*, *Callidium*, *Necydalis*, *Molorchus*; Lepturides

には *Leptura*, *Rhagium* と 11 属を分類した。

Latreille はその後色々分類法を考え、1825年では Longicornes 科を Prioniens, Cerambycins, Necydalides, Lamiaires, Lepturetes と 5 亜科に分け、1829年に Necydalides を除き、上記の4つの亜科に約20属を分け、現在の亜科の分類の基となった。以上が現在のノコギリカミキリ、カミキリ、ハナカミキリ、フトカミキリ亜科の設立の略歴である。

クロカミキリ亜科は言葉としては、Serville (1832) が41属を分類する時に用いた Spondyliens が最初であるが、亜科に相当する取扱いは Mulsant (1839) に始まる。

ホソカミキリ亜科は現在の Tribe 相当のグループとして Thomson (1860) が Disteniidae としてその特異性を認めた。Lacordaire (1860) は Disteniidae として亜科に相当する位置を与えたが、この中に現在のハナカミキリ亜科も含まれていた。現在の内容の亜科としては Gahan(1906) からである。

マルクピカミキリ亜科も Thomson (1860) により Asemitae が設立され、彼は1864年に亜科相当の取扱をしたが、その後これに従う人は無くてカミキリ亜科中の一族として分類されていた。Webb (1912) あたりから再び亜科として復活したようである。

ニセクワガタカミキリ亜科は、Parandra が Latreille (1804) により作られた時、カミキリとしては考えられず、ヒラタムシ科 (Cucujidae) 中に入っており、1845年 Blanchard によりカミキリの仲間入りをし、Parandrites なる族が作られた。永い間ノコギリカミキリ亜科に属していたが、最近(1958) Linsley は亜科として独立させた。

日本で行われているカミキリの分類(1968, 林 匡夫氏)の亜科を纏めて見ると、次のように命名者を選ぶのが妥当と思うが、亜科の設立者と現在の内容の亜科に訂正した人とは別の場合が多い。

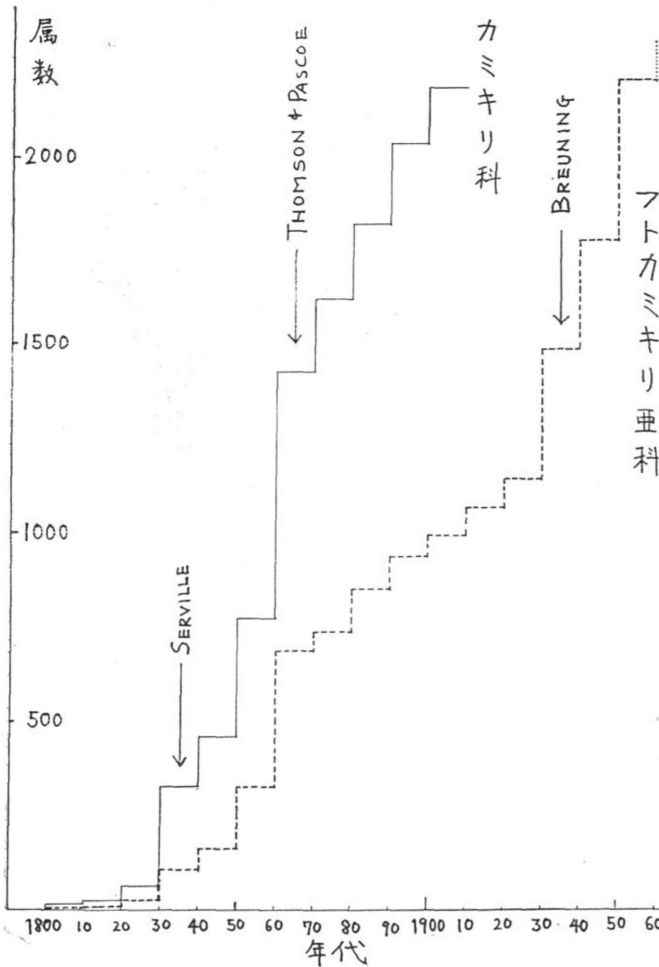
Prioninae	Latreille	(1804)
Cerambycinae	Latreille	(1804)
Lepturinae	Leach	(1815)
Lamiinae	Latreille	(1825)
Spondylinae	Serville	(1832)
Parandrinae	Blanchard	(1845)
Disteniinae	Thomson	(1860)
Aseminae	Thomson	(1860)

#### (5) 属の増加について

科の概念の確立により属についての考え方が変わり、Linné らの亜科程度の大きな属から、現在の属に近いより小さな単位への変換がされるようになった。

Dejean (1821) は一度に13属をつくり、属数増加の口火を切ったが、彼の属はその後一つも認められず (Junk のカタログ)、大部分は1820年代に全く同じ属名で再記載した他の人の名前で使用されていたが、最近 Linsley (1962) によりその中の3つ、*Pachyta* Zetterstedt, *Obrium* Curtis, *Purpur-*

第1図 世界のカミキリムシの属(亜属を含む)の増加



第3表 世界のカミキリの属の増加

年代	ノコギリカミキリ亜科 (Lameere 1913)		カミキリ亜科 (Aurivillius 1912)		フトカミキリ亜科 (Breuning 1958-1967)		カミキリ科 合計	
	属数	小計	属数	小計	属数	小計	属数	総計
~1760 (1758)	0	0	3	3	0	0	3	3
61~1770 (1762)*	0	0	0	3	0	0	0	3
71~1780 (1775)	1*	1	4	7	2	2	7	10
81~1790 (1784)	0	1	1	8	0	2	1	11
91~1800 (1792)	0	1	1	9	0	2	1	12
1801~1810	1	2	2	11	4	4	5	17
11~20	0	2	5	16	15	8	9	26
21~30	2	4	19	35	78	23	36	62
31~40	53	57	135	170	37	101	266	328
41~50	12	69	58	228	63	158	127	455
51~60	27	96	123	351	160	321	313	768
61~70	29	125	267	618	354	681	656	1424
71~80	23	148	118	736	10	735	195	1619
81~90	9	157	81	817	191	845	200	1819
91~1900	5	162	119	936	54	936	215	2034
1901~10	9	171	90	1026	54	990	153	2187
11~20	12	183	23	1049	66	1056		
21~30					86	1142		
31~40					340	1482		
41~50					297	1777		
51~60					427	2204		
61~**					109	2313		

\*最近では *Prionus* Fabricius (1775) ではなくて、Geoffroy (1762) とされている。(本文参照)  
\*\*主として1964年まで。

第2表 属(亜属)の設立者

名前	属の 発表年代	ノコギリカミキリ亜科 (1913まで)		カミキリ亜科 (1912まで)		フトカミキリ亜科 (1964まで)		カミキリ科合計		
		属 数	シノニム	属 数	シノニム	属 数	シノニム	独立 属計	シノニム 合計	総 計
Thomson	1857~1879	33	10	144	62	235	95	412	167	579
Pascoe	1856~1888	13	3	138	19	185	61	337	83	420
Bates	1861~1892	7	2	94	6	117	20	218	28	246
Serville	1825~1835	37	4	80	7	42	3	159	14	173
Fairmaire	1859~1903	3	2	76+4*	16	27+4*	16+1*	114	35	149
Newman	1833~1850	5	2	43	8	27	2	75	12	87
Gahan	1867~1911	4	2	33	3	37	5	74	10	84
Laconlaire	1830~1872	4	0	24	34	14	8	42	42	84
Le Conte	1850~1860	1	1	41	18	15	5	57	24	81
Chevolat	1833~1858	3	0	26	19	14	1	43	20	63
Mulsant	1839~1863	1	0	22	19	14	7	37	26	63
Breuning	1934~	0	0	0	0	892+19*	50+2*	911	52	963
Aurivillius	1886~1928	2	0	40	0	86	25	128	25	153
Pic	1891~1945	0	3	11	8	57	43	68	54	122

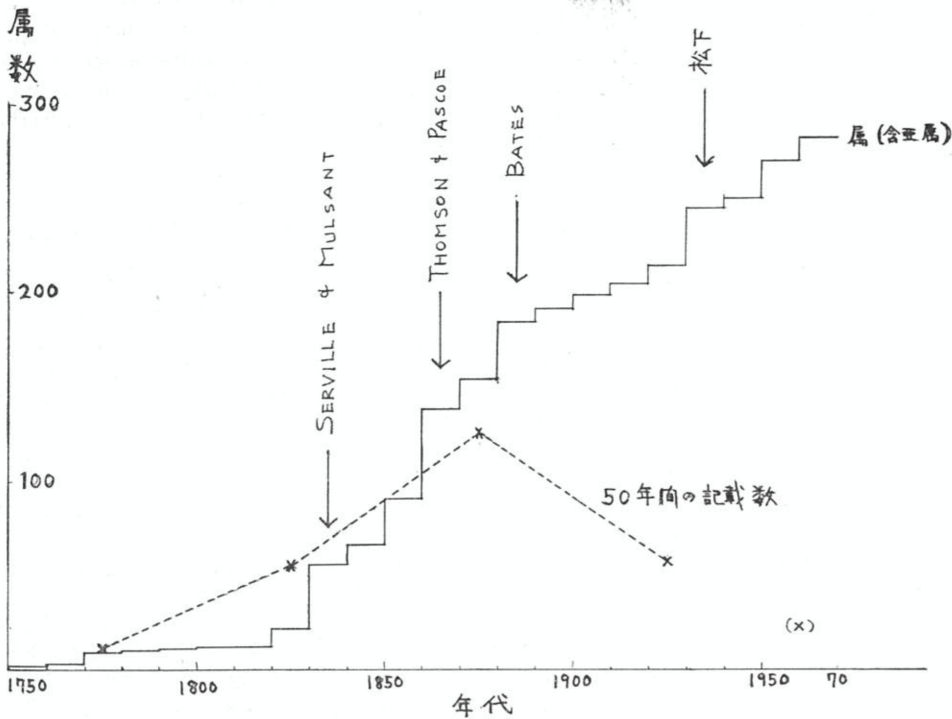
\*上の数字は共著で発表した属数

*genus* Germar が Dejean の設立に変更された。

世界のカミキリの属の増加を調べて見ると、属の概念を大きく変化したのはまず Serville である事が判る。彼は主として1832年から4年間に160属を新設した。次の爆発的な属の新設は Thomson と Pascoe で19世紀の後半に2人で約1000属が発表された(第1図)。最近ではフトカミキリ亜科に於ける Breuning で、彼は属の分類の基準を新たにし、1934年以来一人で950以上の属および亜属を作り、まだまだ新設するであろう。1910年までの世界のカミキリの属の設立者を多い順に第2表に示し、参考としてフトカミキリ亜科の属を主体として、その後の発表者3名を追加した。

世界のカミキリで一番困ったのは属の認定で、現在はシノニムにされているが、使用したカタログでは独立の属になっているもの、またその逆の属、亜属と属の関係であるが、一切使用したカタログの著

第2図 日本産のカミキリムシの属(含亜属)



者の意見に従い、亜属も属としてこの統計を作った。カミキリムシ科全部のカタログは約50年前のいわゆる Junk のカタログをもって最後とするので、カミキリムシ科の統計は1910年までとしたが、フトカミキリ亜科は最近 Breuningによる新しいカタログが出版されたのでこれに従い、Junk の Aurivillius (1922~23) ではない。(第1図, 第3表)

現在日本に産するカミキリムシ約650種について、その属および亜属が何時作られたかを示したのが第2図である。10年間に属および亜属が30以上設立された時代は4つあり、その時代に主として活躍した人々は次の様である。

- 1831~40 Serville と Mulsant
- 1861~70 Thomson と Pascoe
- 1881~90 Bates (1884)
- 1931~40 松下真幸 (1933)

前の2時代は世界のカミキリと同時代で、後は日本産のカミキリに特異な現象と云える。また50年間ずつくぎってその設立された属数を見ると、19世紀後半がピークになる。

日本の属の命名の多い人を示すと

Bates 32	Pascoe 25
Thomson 24	Mulsant 21

以上が四天王である。

(静岡大学理学部)

#### ○山梨県下におけるフタホシサビカミキリの追加記録

筆者は先に甲虫ニュース No.6 に山梨県下で得られたフタホシサビカミキリ *Lopica honesta* Pascoe 2頭の記録を報告したが、1970年にも山梨県下にて採集されたのでここに追加しておきたい。

1頭, 5. iv. 1970, 山梨県韮崎市韮崎駅, 秋山黄洋採集

採集者によれば駅構内のクモの巣にかかっていたものを得たと言う。この標本は上翅の微毛がかなり取れてしまっており、後方の白色紋は明らかではないが、本種であることに間違いのないと思われる。これで著者の知る限り本州で採集されたフタホシサビカミキリは4頭となったが、これら以外にも山梨県下にて採集されたという話もある。何れにしろ本種が山梨県~東京都に分布していることは確実であろう。尚、上記の標本は筆者が保管している。

(横浜市金沢区 高桑正敏)

#### ○トゲニセマグソコガネの生息場所

昆虫学評論, 第22巻, 第1号, 55~56頁 (1969) に後藤光男氏はトゲニセマグソコガネ *Caelius denticollis* Lewis の習性について興味深い報告を載せておられる。そこで、いささか古い話で恐縮ではあるが、私が本種を採集した時の状況を述べて御参考

に供したく思う。

1949年5月6日、福島県南会津郡館岩村湯の花で全く腐朽して地上に横たわる長さ約2m、直径約50~80cmのブナの伐木数本を発見した。早速割ってみると、土みたいに腐朽しているのは表面だけで、内部は著しく水分を含んではいないが土みたいにはなっていない、年輪にそって割ったり剥いたりすることが出来、この部分にいろいろな甲虫がひそんで越冬していた。その大部分はトビイロセスジムシ *Rhyssodes comes* Lewis であったが、中にトゲニセマダソコガネが2頭混じっていた。朽木は表面に枯草や枯葉が一面にまっわりついていたので、恐らく夏には一面の雑草のやぶの中に埋れて全く日光に当ることはないであろう。なお同時に見出されたトビイロセスジムシは朽木の材部深く潜み、年輪にそって剥がすと同一方向を向いて数頭、多いときには20余頭が並び、採集した数は130頭にもなった。本種は深山の朽木に多く、各地でよく採集するが、このように多量に採集したことはこの時以外にはない。

(東京世田谷、黒沢良彦)

#### ○ムネアカツヤノミハムシとその分布

ムネアカツヤノミハムシ *Luperomorpha japonica* Chûjô et Ohno は1965年、北海道の奥士別(上川)および九州の佐多岬(鹿児島)産の標本をタイプとして、筆者らによって記載された種類である(Chûjô & Ohno: A revision of *Luperomorpha*-species occurring in Japan and the Loo-Choo Islands, Mem. Fac. Lib. Arts & Educ. Kagawa Univ., II(131): 1~16, 1965)。体長3.2~3.5mm。黒色で、前胸のみ赤褐色を呈する。*Luperomorpha* 属にしては比較的大型で、その上、背面の隆起もやや顕著であるため、一見ヒゲナガハムシ亜科の *Monolepta* 属のある種、たとえばホタルハムシ *M. dichroa* の原型を思わせるところがある。

体色の点(黒色で前胸赤褐色)で *japonica* に似ている本邦産(琉球を除く)の種には、なおサンショウノミハムシ *L. pryeri* (Baly) とクワノミハムシの1型 *L. funesta* (Baly) f. *collaris* (Baly) の2種がある。しかし、*pryeri* は脚が完全に赤褐色であることと、前胸のほか頭部まで赤褐色を呈することにより容易に区別でき、*funesta* f. *collaris* は脚が部分的(転節、腿節の基部と端部、脛節の基部、跗節など)に黄褐色を呈することと、触角の基部が褐色を帯びること、更に前背板の点刻間が平滑でないことなどの特徴で区別することができる。

木元(1966)は日本産ハムシ科のモノグラフの中で上記の *collaris* を独立種として扱っているが、この *collaris* は真の *collaris* でなく、筆者らの *japonica* を指すと考えてよいようである。なぜなら、木元は *collaris* の特徴として、前胸が赤褐色である以外は、触角も脚も完全に黒色であり、また、前背板も小点刻を印すだけで平滑であると述べてい

るからである。この特徴は *japonica* のそれに一致するもので、*collaris* の特徴にはならない(*collaris* の原記載には、触角は完全に黒色でなく、基部4節が淡色であると記され、また前背板も点刻間は平滑でなく、*interspatiis tenuiter strigosis* と明記されている)。こうした特徴をもつ *collaris* は独立種でなく、*L. funesta* の1色彩型として扱われるべきである。

*L. japonica* の既知産地は、前述の奥士別、佐多岬の2ヶ所のみであるが、次の新産地を追記しておく。これらの標本は筆者が *Monolepta* と誤って *Galerucinae* の標本箱中に納めておいたため、本種の記載をつくらうとき、タイプに指定できなかったものである。筆者自身の採集品はともかくとして、提供者の宮森健一、田中忠次の両氏に対しては、相済みぬことであり、ここにおわびしなければならない。

1. 虎杖浜(胆振、北海道)、1頭、12. vii. 1953、宮森採集
2. 谷川岳(群馬)、1頭、31. v. 1954、筆者採集
3. 称名桂谷附近(富山)、1頭、20. v. 1960、田中採集

以上3例の他、栃木県黒磯で採集された標本(加藤仁氏採集)を検したこともある。

なお、木元の *collaris* に関する記録も *japonica* のそれと見なし得るので、城山(鹿児島)、Nibushi(北海道阿寒)の2産地がこれに加わることになる。

そこで本種の既知産地を整理すると、北海道(上川、釧路、胆振)、本州(群馬、栃木、富山)、九州(鹿児島)ということになり、個体数は少ないながら、北海道から九州にかけてかなり広く分布する種であることがわかる。四国からは未知であるが、恐らくこの地方からも発見されることであろう。

食草は不明であるが、群馬県における筆者の採集経験よりするとヤナギ科である可能性が高い。

(埼玉県鶴ヶ島町 大野正男)

×

×

#### 甲虫談話会

会費(1カ年)500円、第13号は7月末発行予定、投稿〆切は6月30日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園  
国立科学博物館動物研究部内  
電(822)0111、振替東京60,664

マレー半島産甲虫類(コガネムシ、クワガタムシ、カミキリムシ、ゾウムシ、其他)が多数入荷しています。御希望の方は返信料御封入のうえ価格表を御請求下さい。

東京都練馬区石神井局私書箱2号  
大蔵生物研究所